

謝 辞

大 場 衣 織

はじめに

私が神奈川大学大学院に入学したのは、2007 年のことでした。石黒先生と私の師弟関係はそれから今現在まで、11 年にも及びます。私は神奈川大学大学院の博士前期課程に2年在籍し、博士後期課程には6年在籍しました。前期・後期課程のどちらも石黒先生の下で学んだので、神奈川大学大学院で石黒先生にお世話になった期間は8年にも及びます。神奈川大学大学院を卒業した後も私が新しい論文を書く度にそれを見てもらったり、私の講演の感想をもらったりして、石黒先生との交流は今も続いています。ここでは、神奈川大学大学院での石黒先生との思い出の一部を紹介していきたいと思います。

石黒先生との出会い

学部生の頃の私は神奈川大学名誉教授 伊藤克敏先生のゼミに所属していました。そのため、石黒先生の授業は受講したことがありませんでした。私の大学院博士前期課程に入学する年は、伊藤先生が退職を控えており、大学院の学生を募集しないことになっていました。それなので、私は伊藤先生に専門分野に近い石黒先生の研究室へ所属することになったのです。石黒研究室ではすでに先生の下で学んでいた O 先輩がおり、それに私と同年の M 君と私とで新しい石黒研究室がスタートしました。その時の研究員のメンバーは皆、学部の際は石黒ゼミ以外のゼミに所属しており、私を含めて石黒先生の下で学ぶのは大学院に入ってからが初めてのメンバーで構成されていました。石黒先生が「学生に対して広く門を構えていてあげたい」と言っていたことが、私の記憶に残っています。当時の石黒研究室のメンバーはその言葉を象徴するようなものであり、石黒先生らしい研究室であったと思います。このメンバーでのエピソードは、後の章で紹介したいと思います。

石黒先生の指導

私が石黒先生のことを思い出すとき、一番に思い出すのは先生の険しい表情です。石黒先生は私にとって、とても厳しい指導教授でした。私が博士前期課程の頃は石黒先生に「あなたは後期課程に進む学生なのだからしっかり学びなさい」と言われてきました。博士後期課程に進むと、「あなたは後輩のお手本になるような先輩になりなさい」と指導してくれました。そのため、特に後期課程の学生になってからは、私はどの学生より早く教室に入り、どの学生より教室を後にするようになりました。大学院時代に私が身につけたそのような習慣は教員になった今でも続いています。その他にも石黒先生の厳しい指導を思い出させる出来事を今でも覚えています。私が大学院博士後期課程に在籍していた頃は毎年、論文を1つと研究発表を1回行うことを課されていました。ある年に私が学会の準備に追われていたので、研究発表を辞退したいと先生に申し出たことがありました。しかし、石黒先生は困難に直面しても、研究発表をするように私に促しました。結果的には、先生の助言のおかげで私は学会の準備と研究発表の両方を成功させることができました。

ユーモアのある石黒先生

先ほどの章で述べたように、私が一番に思い出す石黒先生は厳しかった先生の姿ですが、先生はとてもユーモアがある人でもありました。私が博士前期課程1年生の時、前の章で言及したO先輩と私と同学年のM君と私とで毎週、石黒先生の授業を受けていました。ある時、石黒研究室のメンバーで神奈川大学英語英文学科主催 英語教育研究大会の準備を手伝うことになりました。石黒先生は私たち学生に、「研究大会を催す上で何が必要になると思う」と尋ねました。私たちは必要になるであろう物を順番に答え、誰かが「研究大会の横断幕が必要だ」と言いました。すると後日、石黒先生は習字道具を持ってきて、「この中で一番毛筆の上手い人が研究大会の横断幕を書こう」と言いました。突然、毛筆の腕比べが始まったのです。最後には、横断幕はパソコンで作ることになったのですが、石黒研究室のメンバーは先生の発想に驚かされながらも、楽しんでその腕を競い合ったことは今でも覚えています。

もう一つ、同じ英語研究大会での出来事で印象に残ったものがありま

す。毎年、英語研究大会の前には沢山の教員や研究者の方々へ研究大会の告知を送ることになっていました。しかし、ある年に告知を送るための何百人にも及ぶ住所録データが全て消失してしまったのです。石黒先生は私たち研究室の学生に「今年は1人、10通ずつ手紙を書いて、皆で100名にお知らせを送ろう」と言いました。石黒研究室のメンバーは皆、先生の決断に驚きつつも手書きでお知らせを書くつもりでいました。しかし、他の研究室の大学院生達も消失したデータを復元する作業を手伝ってくれることになり、一から消失したデータを復元することになりました。私の記憶では500人もの住所を大学院生達で一からパソコンに入力し直したのではないかと思います。大学院生達が研究室の垣根を越えてこれだけ大掛かりな、根気のいる作業に協力してくれたのは、石黒先生の人柄があってのことだったと思います。石黒研究室のメンバーだけではそのような仕事は達成できなかったのではないのでしょうか。

結びにかえて

学生の頃の私は、石黒先生の研究における発想や分析は到底、真似できないものであると感じていました。先生と同じ分野の研究をしている者であるからこそ、そのように強く思ったのではないかと思います。当時の私は、先生の弟子に相応しい自分でいなければならないと思っており、私なりに努力はしてきたつもりなのですが、自分が先生に相応しい教え子だったとは一度も思えることができないまま大学院を卒業しました。そのことを今も先生に対して申し訳なく思っています。これからも石黒先生の弟子に相応しい自分になれるよう、私の精進の日々が続くことだろうと思います。

私が大学院にいた時、石黒先生はユーモアのあるやり方で私を導いてくれたので、幸いなことに私は論文を書くことが嫌いではありません。それなので、私にはこれから書いてみたい論文のテーマが沢山あります。今後変わらず、先生から私の論文に対して貴重なご意見を頂けたら幸いです。石黒先生、8年もの長きに渡り私を指導して頂きありがとうございました。また、長い間、神奈川大学のためにご尽力され、お疲れ様でした。